

「三本か？」

「早く買つて来い。」

「小僧あんまり頭を撥ねやがるなよ。」

小僧はにやにやしながら出て行つた。と入れちがひに、部厚い唇を顫はしながら、先刻門壁に身をよせてゐた巡警が、のつそりとカンテラの光の中へ姿をあらはした。

「寒い晩だな。ここの家は景氣がいいな。どこかに婚禮でもあつたのか？」

茶を汲んで出した亭主が、へらへらと笑つた。

「御役人、俺らめし屋をやめて、酒屋をしようかと思ふよ。この連中は、酒ばかり喰つてゐる。近頃はストライキで景氣がいいんだろ。」

「さうか。その時ア、俺も番頭になりたいもんだ。堪らねえよ、全く。この寒さに、用もないのによる夜中立たせられてるちや。」

苦力の一人が擲擽ふやうに云つた。

「お役人、そんなことを云つて釣つて見るんでせう。——ここには、傳單撒きや、便衣隊なんて居ま

せんぜ。みんな溫和しい奴らばかりだからね。」

巡警は、茶碗から手を放して、ポケットに手を突込んだ。一同は、ぎよつとした。巡警の取り出したものは、一と掴みの傳單であつた。

「これか？」彼は、それを紙屑のやうに無雑作に餉臺の上へ投つて見せた。「こんなものを撒いたり貼つたりする人間を捕へると云ふんだが、そんなことしたら、ピストルの彈丸ア幾百あつたつて足らないな。第一、ピストルなんて、五六發とつづけて打てるもんぢやないぜ。狂つちまふさ。——それでこの傳單に、何が悪いことが書いてあるのか、俺にはわからないよ。——いいか、打倒帝國主義よ。それからこつちは、樹立上海市民政府よ。もう一つの方は、驅逐北方反動的軍閥だろ——俺達の始終考へてることぢやないか！——ちよつと讀んで見るか。……軍閥孫傳芳の末路は迫つた。戰鬪的な上海市民、労働者、學生は、武装暴動によつて、一舉このミスボラしい軍閥政府に一撃を喰らはせ上海市民政府を直ちに樹立せよ！」こんなことは當り前のことだ。俺達の仲間でも、孫傳芳なんてものに既うから愛憎をつかしてゐるものは澤山あらア。もう浙江省が自治になつちまへば、江蘇省の自治もわかりきつてゐることぢやないか！ 俺ア現職として、今度成立した上海特別市市民公會へ加入は出



来ないが、しかし、強い方へ味方するのは俺の主義だ。——いまに、俺達巡警もストライキをしかねないと思つてゐてくれろ！」

小僧が老酒の瓶を抱へて歸つた。

「オハヨウ」が云つた。

「御役人は、俺達、傳單を撒いても捕へないかね？」

「捕へたつて、この勢ひぢやどうとも出来ないだらう。一人や二人で撒くんぢやないのだからな。」

「偉らい！ 偉らい！ 俺達の味方だ！」

「何、俺はもとから御前達といつしよなんだ。只食ふに困るからかうやつてるんだ。——だから、たまには、酒の一杯も御馳走になりたいな。」

「さア、酒だ！ 酒だ！」

「ふむ、この新しい味方のために乾盃しようぜ。」

「乾盃！ 乾盃！」

多数の人間の影の二重にも三重にも折重なつた餉臺の上に、茶盞で赤くなつた茶碗が持ち出され

た。ブリキ罐から、その一つ一つに酒がうつされた。無数の太い爪垢だらけな指が茶碗を掴む。

「俺達は北伐軍を歓迎する！」

魯沈が音頭を取つた。

「北伐軍萬歳！」

もう一度酒が満たされた。

「中國共産黨萬歳！」

「オハヨウ」が叫んだ。

一同は、高く茶碗を捧げて、それにつづかうとした。

「中國——」

けたたましい背後の爆音と共に、肥つた巡警は、茶碗を宙に投げ上げたまま、ベンチの上へのけぞつて、眼を白くするとどしんと倒れた。一同は、爆音のする方を振り向いた。た、た、た——と逃けて行く靴音がする。

「オハヨウ」が、壁に手を支へて、闇の中をすかして見た。その時、ばんぐ、ばんぐ——と二發の砲



聲が、すぐ眼の前で破裂した。六軒長屋の暗黒が、ぱつぱつといふ火花で明るくなつて、すぐもとの闇にかへつた。

表の方にあつて、人間の唸る聲と共に地響を打つて倒れる音がした。

田中のすぐ眼の前に、『オハヨウ』がぎらぎらするピストルを握つて立つてゐた。

『リヤングか、発砲したのは？』

彼は長屋の闇にむかつて聲を張り上げた。

『おっ、わしだ。南京の男はえらい調法なものを袋へ入れて持つて来たな。——今ちよつと試してみたいところよ。』

マツチを指つて、『リヤング』はカンテラをともした。この爺は、案内でもなさうだ。

四五人の苦力が、表の方へ走つた。ほかの者はベンチから、逆さにのけぞつてゐる巡警を助け起した。田中は、『リヤング』のところへ近よつて、カンテラの下に爺さんの改めて見てゐるピストルを眺めた。南京米袋には、無数のピラ束の間に、殺氣を帯びた單銃が四五挺頭をもたけてゐた。

『くたばつた、この犬め！』

『往來へ投げ出して置け！ その前に服を剥け、ピストルも必要だ。』

表の方で、苦力達がひしめき合つた。

『さあ、かうなつたら、ゆつくりは出来ねえぞ。みんな若い連中は、ここへ集まれ！ 一杯飲んで、

元氣をつけて本部へ引上げよう！』

この間田中を詰問した青い顔の苦力が、めし屋の隅からはじめて前へ出て、片手を舉げた。その腕には、赤い腕章があつた。

『もう駄目だ。死んでるよ。』

坊主頭が、巡警の手を離した。手は、餉臺をかすめてどしんと落ちると、茶碗の一つを粉みぢんに床石の上へ敲きつけた。

『しようねえなア——しようがねえ！』

めし屋の亭主は、巡警の腕を取ると、するするとそのまま床を引摺つて行つた。坊主頭が足を取つて手傳つた。

『ま、待て、この巡警の服も可哀そうだが剥いで置かう。魯沈、お前、この服を着ろ！ それから、



みんな小舎へ行つて、十分に足拵へをするんだ。老人は残つとれ、どうせ手が這入つても、俺達さへ  
 るなけりや大丈夫だ。」

赤い腕章はかう云つて、腕時計を見ながらめし屋を出た。

「兄弟、あの河口の船には、澤山の同志が監禁されてるさうだぜ！」

はじめて、田中は、腕章に近づいた。

「黄浦口のか？——船會社はゼネ・ストを惧れてるんだ。有難う。しかし、その方は、他の連中がや  
 るよ。」

めし屋が空つほになると、急に長屋の方がどさくさし出した。

「萬物は流轉する！ あーア！」

空つほなめし屋で、木馬の老人は、白髪頭を双手でがしがし搔き撚つた。

「俺はどうしよう？——君達と一緒に働かうか？」

田中は腕章の袖を曳いて訊ねた。

「東洋——黙つて見てるてくれよ！ これからが本當に上海の擾亂になるんだ！ 俺達には二重の闘

争がある。——帝國主義資本と、その手先になつてる支那の犬共だ！」

腕章の若い苦力は、尖がつた顔に、不思議な笑ひを泛べて、ぶつきら棒に返事を投げた。

その笑ひは、殺人的でさへもあつた。

## 14、影となつた男

「マッチを御持ちですかえ？」

「えッ——。マッチ、かね？」

「はア、マッチをちよつと拜借したので。」

マッチが取り出される。牛の頭が黄ろく描いてあつて、「牛頭牌火柴」利民火柴廠製造と書いてあ  
 る。一個平凡なマッチが、手から手へ渡つた。

渡る拍子に、田中の手は、残りすくなの箱の中のマッチ棒が、かちかちと鳴る程度に顫へてゐた。

しかし、元來喫煙家が他人へマッチを渡す時には、一應、内容の有無をたしかめるために、箱ごと振



つて差し出すといふ細かい本能的な行爲もあるものである。

相手の男はさりけなく葉巻へ火を點じた。

「どうも有難う。時に、今日は、どちらの方へ、林さん？」

「僕ですか？——僕は、林ぢやないですよ。田中といふものです。」

「いや、御隠くしになつても駄目ですよ。どうです、その御洋服の合はないことは！ まるで、小沙渡あたりの古物屋から、宿屋のボーイに頼んで取寄せられたと云つた趣ですな。——いや皮肉は失禮。しかし、追がに、尾行を撒かれる腕だけは、國際的な御習練で見上げたもんですよ。はは、はア。——」

先方は、スコッチの撚りの荒らい服を、細かい茶微塵みたいな、カットのたるみのない洋服に變へてゐて、それに釣り合ふ茶鼠の中折をかぶつてゐた。氣がつくと、この男の左の鼻柱に、大きい黒子があつた。

「林でも、田中でも、高橋でもいいんだが——さて、君は、僕に何か用があるのかね？ この間もたしかどこかで出遇つたやうな記憶もあるが？」

と、左の黒子が見えなくなつて、冷たい、残忍さうな笑ひが、右の頬へ深い口皺を刻んだ。

「ハルピン以來、すうつと貴方のお蔭で忙しくしてゐる小名木を、いくらお忙しいからと云つて、お忘れになる筈はないぢやありませんか。——そりあ、北京ぢア貴方にうっかり置いてけほりを喰ひましたがね、幸ひ電報は打つてありましたから、聯絡はとれてましてな。もう、この上海ぢア、あの手は駄目ですよ。しかし、今後もあることですから、これを機會にお互ひにお近づきになつて置かうぢやありませんか？」

「——君は、失禮だが、いくら僕の跡を尾けたつて、徒勞だよ。第一、僕は、先刻も云つた通り田中功といふ人間なんだし、それから、僕の仕事といふのは、君の考へてるやうな素情の知れないことぢやないんだよ。僕は、内地に旨い仕事が見つからないので、何かほろい事でもないかと思つて、かうやつて上海を探がしまはつてゐるんだよ。お門違ひ様！——急ぐから、ここで失敬！」

大馬路のデパートメント・ストアの四辻から、北の方へ切れ込まうとした田中を、黒子の男は、何かの武器でもあるやうに、左手に葉巻を握ると、強く田中の襟首を右で押へた。

「おい、林、君は刑事被告人ぢやないから、今直ぐどうのといふことはないが、豫めこれだけ忠告し



ておいてやる。——いいか、君の一舉一動は、俺だけが見てるんぢやないんだよ。それから、例のカールトン・ホテルにア、もうあのソニヤはるないんだぜ。さあ、これだけ聞かしたら、あとは陳獨秀と會合しよう、コレヴィツチと會はうと、君の勝手だ！ 尤もその時にあ、かういふものがちあんと俺達のボツケットに潜んでるぐらゐは覺悟するんだね！」

その男のボツケットからは、犬を繋ぐやうな鎖の一端が見え、それをまさぐる指先に、冷たい鐵の輪が光つた。

田中は、唇に啣へてゐたシガレットを、生れつきの無精さとは別に、ベツとアスファルトの上へ吐き出した。

「そんなものが怖くて、人間が動いてゐられるか！ 来いならいつでも行つてやるよ！ しかし、僕達を無暗に檢束する前に、お前達は議會で治案維持法案を通過させなきあならないことを、よく覺えておけ！」

かう云ひすて、田中は大手を振つて歩き始めた。

ものの一町も焼買屋の續いた通りを歩いて、鋪道の端きたところでひよいと振りかへると、茶微塵

の服は、瀬りに手を振つて何かを饒舌つてゐる支那服の男と、自分の後ろ姿とを等分に見ながら、まだ四辻に立つてゐた。

「あの、支那服もさうか？」

それに氣がつくと、つい眼の前の煤けた硝子戸のうしろからこちらを見てゐる、煙草屋の支那人さへも密偵らしく思へた。

「林といふ男は、よほどな注意人物と見える。なるほど、俺が専門に雇はれたのも無理はねえや——ええと、さて、この邊で俺が林たつたら、どんな事をするかな？ よし、あそこへ駆けこんでやれ！」

彼は、即座の思ひつきで、街を斜ひに横切り、わざと人目につくやうに、外國人の本屋の中へゆつたり歩を運んだ。

英字新聞やら、けばけばしい活動女優の顔を刷り出した雑誌やらが店の半分ほどを占領してゐると、その奥は本棚になつてゐて、小説類が派手な背を見せて並んでゐた。どうせ上海あたりへ來てる外國人のことだから、むづかしい本はきらひらしく、どれを見ても目出度し々々々の戀愛小説らし



く思はれた。中には、かつてどこかで誰かが讀んで、その話を聞かされたやうに思はれる『デカメロン』などといふ猥本が、人目につき易い場所へのさばり出てるた。支那人のボーイが、田中の買はないのを知つてゐるやうな風で、わざとらしい英語で訊ねた。

「何をお求めになりますか？」

「皆小説だね？ 民生主義や共産主義の本はちつともないぢやないか？」

「さあ、そりや本屋が違ふ。日本の本屋へお出でなさい。中國の翻譯もある。英語——英米人、そんなもの讀まないです。」

素見の客を送り出すやうに云つた番頭は、一應の義務を果した風に隅つこのベンチへ引き返した。

田中は、窓の外に、『ノース・チャイナ・デリー・ニュース』か何かをひろげて見てゐる支那人の項が、廣東人のやうに黄黒いので、支那人でないことを發見すると、にやりと笑つて店を出た。支那服を着た高等にちがひない。

そこから、林の田中と、支那人の日本人との數時間の鬼ごつこが始まつた。

二人の追ひつ追はれつした上海の街は、今しも、見えざる大洪水の襲來に慌てて準備してゐるやう

な街だつた。

しかし、それは、洪水のやうに單純なものでもなかつた。

厄介なことには、襲うて來るものが思想であり、その思想に發奮し動員された無数のプロレタリアートであつたことである。これは、馬賊や土匪とちがつて、世界のブルジョアと相容れない階級意識を持つた男や女が、プロレタリアートだけの持つ統制とイデオロギーの下に、新しい戦術を以て、すべての古い力に對つて搏撃して來るのであつたから、いくら鐵條網をめぐらし、砂囊を積みあげたところも、どこからどこまでを占領し、どこからどこまでが安全だとは云へないのである。しかも、この水のやうな、風のやうな力は、自由に鐵條網や砂囊を乗り越えて、被壓迫民族である支那の勞働者や農民のゐるところには、必らずその感染力に應ずるものを見出すといふ不思議さを持つてゐた。

さういふ大きい豫覺のもとに昂奮してゐる街々には、どことなく逃げ支度をしてるやうな銀號や、大きい取引店などが目について忙しかつた。四辻の一角所では、黒山のやうな人だかりがして一人のめかしこんだ中年の支那婦人を中心に、群集がわいわい騒いでゐた。家鴨のやうによちよちした纏足の婦人は、張りめぐらされた英國の陸戦隊の鐵條網に引つかかつて、その裙子が鍵裂きになり、そ



れをひき離さうとして焦心すると、今度は牡丹の花を刺繍した上衣の袖をとられて、世にも醜惡な顔をして口惜しがつてるところであつた。群集は、何のためか、一向にその婦人を助けようともせず、冷静にからかひながら笑つたり、冷やかしたりしてゐた。

もう一つの街では、アメリカの兵隊が揃つて行列して來るのを、慌てて横切らうとした黄包車が、印度人の巡警にひどく吠鳴りつけられて、櫂の棒で續げざまに素頭を毆られた。それを見てゐる群集の眼には、確かに、今に見ろ、といふ憤怒の閃きがあつた。

一軒の家からは、子供が小さな青天白日旗を持つて飛び出すと、その母親らしい女が、吃驚したやうに追ひかけて、小旗を奪ひ取ると、掌の中にまるめ込んで、何氣なく手鼻をかみながら前後をふりかへつて見てゐた。

ぶらぶら良い氣持ちになつて歩いて行く田中の前に、綺麗なボツブ・ヘアの娘が横合ひから現はれたと思ふと、ちよつと擦れちがつたはづみに、一枚の傳單を彼れの手に残して行つた。

『××陸戦隊水兵諸君に告げる！』

といふ題で、數行の日本語が刷つてあつて、最後には『中國共產黨江蘇執行委員』と大きく書いて

あつた。日本では、勞働者風をした學生の撒くビラを、上海ではダンサーのやうな娘が撒いてゐる。服に見えて、革命が近づいてゐるやうに、田中には思はれた。

『君、今、何か受取つたでせう？』

『君は誰だ？——何の權利があつて、そんな事を僕に訊くのか？』

意地づくになつて田中は對手をはぐらかした。やはり、最前の支那服である。

對手の態度が、急に紳士的になつた。田中は、ポケットへ傳單を固く捻ぢ込んだ。

『いや、どうも失禮。私は、かういふ者ですが。……實は、咄嗟の場合なもんですから、甚だ申譯がありません。いや、私もこんな事はいやなんです、これも職業であつてみれば、謂はばおまんまの爲めなんですからな。……で、甚だ何ですが、その傳單をちよつと拜見出來ませんか？』

差出された名刺は、領事館の番地と、『上原篤次』といふ名前とを安つほく大きい字で刷つたものであつた。それに準じて、名刺の持主も、先刻の黒子よりも一段と下卑た、いかにも岡つ引らしい、眼だけぎよろぎよろする落ちつきのない男だつた。田中は、ハルビンでさんざんに柔道の稽古臺に自分を弄んだ、顎の四角な刑事事巡査を思ひ出した。かういふのが、ともすると萬事をファツシズムで解



決したがるのだ。田中である林は、軽い侮蔑を鼻の先に見せた。

「僕が、通りすがりの別嬪からラヴ・レターを貰はうと、嬪曳の返事を貰はうと、それとも打倒田中内閣の傳單を貰はうと——そりア君に關係したことぢやなからう？ 君の取締るのは、僕が日本人に傳單を突き付けでもした時のことだ。野暮なことは云はんから、黙つて一日僕のおとにくつついて來るがいい。晩には源茂軒の鴨でも御馳走してやらあ。」

對手は、むつとした顔を、急に横に向けて、わざとらしく向ひのビルディングを眺めた。

思ひ切りふざけてやらうと思つて、田中は、もと來た方向へとつて返すと、折柄來かかつた黃句車に飛び乗つた。

「漢口路——大世界。」

と命じた。

入口で切符を買ふと、彼は、さつさと二階へ上つた。

ほの暗い長廊の兩側には燻ぶつた喫茶店や、勸工場めいた店や、詩の文字を消す博奕や、古風な支那歌劇などが、精一杯の聲で客を呼んでゐた。滑稽に思はれるほどの武行が、汚れた衣裳を着けた女

と、半裸體になつた男との間に演ぜられてゐた。見るともなしにほんやりそこに掛けてゐると、獻果子賣りが、大聲で喚き散らす間を、誰かが何かを田中の膝の上へ押しつけて去つた。それを、うすあかりにすかして見ると

「國民革命軍抗州占領歡迎！」

といふ文字をスローガンとした上海特別市市民公會のビラであつた。

田中は苦笑した。——今日の彼を中心として、スパイとビラとが、交々に爭奪戦をやつてゐるやうな氣がしたからである。

「ほら、もう讀んぢまつたから君へくれてやるよ。」

芝居の出口で、彼は支那服の鼻先へ、そのビラを突きつけた。無感覺な人間のやうに、支那服は黙つて黒い手を差し伸べた。

廊下をもうすこし歩るきながら、不圖、林のことについて、岡部に報告して置かねばならぬことに氣づいた。

「カールトン・ホテルにはソニヤはゐない……コレヴィッチとか陳獨秀とかの關係も知つてる……ど



うせ知れてゐることを、こちらの度膽を抜くために廣言したにはちがひないが、それでも何かの手違ひが未然に防がれないとも限らない。」

かう考へると、今更、背後の人物が邪魔になり出した。

『よし、この間抜け奴、俺の撒きやうを教へてやらう！』

彼はつかづかと、コンクリートの階段へかかると、階下の庭園に、あらん限りの派手な色の上衣着飾つて、ぢやらぢやら附添の太太と練り歩いてゐる淫賣婦の群を見た。

降りて行つた彼をめぐめて、二三十人の散切髪の女達が、庭園の四方から駆け集まつて、燕のやうに口を開いた。

『東洋人！ 東洋人！』

『こちらへ御出で。』

『あたいが先だよ！』

『あたしだよ！』

田中は、うるさいのを我慢して、育減法に差し出された手の一つを握ると、大股にビルディングの

腹を抜けて、横手の木戸を一つ飛び出した。握られた女の冷たい手の中には、指輪とちか合ふ音がして、一弗銀貨が残つた。

銀貨をくれた男は、その時、表の切符賣場から、再び切符を買つて、以前の廊下を、耳の潰れるほどの銅羅の音の下を、物珍らしさうに眺め廻はしながら歩いてゐた。

『あの男は、どうした。』

階下の庭園の隅では、私服の上原某が、眼に角を立てて、包圍された娘子軍の中に聲高な支那語でわめいてゐた。

田中は、歌劇の隣りの茶館へ這入つて、室の暗い隅から一碗の龍井を所望した。

隣りの大立廻りが、天井も抜けさうなドンチャン騒ぎで終つた頃は、先刻の傳單を田中が讀み終つた時であつた。

『なるほど、かういふところに日本人が活動してゐるわけだな。』

彼は、一群の客といつしよに、ゆつくりと表から娯樂館を出た。

それから五分間で、中央旅社の帳場に姿をあらはした田中は、故意に泊り客らしい風を装ふて、つ



かづかと二階へ昇つて行つて、岡部の部屋をノックした。この間とはちがつた支那人ボーイが、うさん臭さうにじろじろ彼を噴めて居つたが、終ひに堪りかねたらしく、手を振りながら厳しい口調で留めた。

「東洋人——ゐない！」

「どこへ行つた？」

「東洋へ歸へつたらう。」

「嘘云へ。俺は約束があるんだ。」

「居ない！」

「開けて見せろ！」

「これを見い。」

ボーイは勝ほこつたやうに、扉の上の名札を指さした。

「寧波人、王方儀」

黒い札にはホワイトで、かう書いてあつた。

「よし……それぢや、貝勤路の百九號だ。あすこなら、何かわかるだらう。」

二階の窓から、階下を望むと、ガラス屋根の下には、この間のやうな張り込みがる様子もなかつた。

それで安心したやうなものの、何かしら不安な豫感が湧いて來ないでもなかつた。

### 15、地下室の銃聲

その家は、いかにも相當の素封の邸宅らしく、低い土塼をめぐらした、中西折衷の三階建の堂々たるものであつた。

コンクリートでドライヴ・ウェイが拵へてあつて、門の門を外づせばそのまま立關まで自動車か滑り込めるやうに出來てゐた。

田中は、すこし壓迫された氣持になつて、何かの手懸りを求めるやうに、家の内外をしきりと見廻はしてゐたが——思ひ切つて、低い門の柱にある鈴を押した。



フランス租界も、この邊の屋敷街になると、まるで世界がちがふやうに静かなもので、二三町先に通る人間がやつと上海であつたことを思ひ出させる位のものであつた。

がちんと玄關の扉が開かれて、穹窿形の廂の下を、せかせかと一人の白服の支那人ボーイが降りて来た。と同時に、ま上のフランス窓にごく微かではあつたが、クリーム色のカーテンの動きが見えて、すぐともとのままになつた。あきらかに、田中功の立つてゐる場所は、その横向きの窓から眞向に瞰おろされたのであつた。

満庭のうす曇りの静寂の中を、ボーイの蹠音だけが軽らく傳はつて来た。

『何か御用ですか？』

ボーイは流暢な英語で訊ねた。

『かういふ人に會ひたいのですが、御在ですかね？』

田中も、覺束ない英語で應じた。

『崎山——さんですか？—今度は、日本語で、田中の走り書きした名前を讀んだ。』その方、ゐないです。』

『では、岡部さんは？』

田中も日本語になつて云つた。

『岡部さんもゐないです。』

『林さんは？——』

ボーイは、ちよつと田中の顔を見かへして、反問した。

『貴方、どなたですか？』

『わしは田中功——かう書く名前の男ですが、崎山さんよく知つてる。ゐたら、わしの名だけ云つて下さい。』

『みなるないです。みなるないですが……』

『ぢや、俄徳さんは？』

『先生は、居られます。』

『うむ、その先生でいいから、ちよつと御會ひしたいと云つて下さい。田中功です。』

『よろしい。待つて下さい。』



再び蹙音が遠ざかり、再び扉が締まり、それから永い間、眼前には枯れつくした木立と、絡らみ合つた瘦枝の向ふに續いてゐる白壁だけが、横たはつた。

今度あらはれた時は、ボーイの日本語も慇懃をきはめたものだつた。

『どうぞ、御這入り下さい。先生御目にかかるさうです。』

ボーイは古風な門を引いて、田中に低く頭を下けた。

自動車のドライヴ・ウェイよりは一段高く築かれたコンクリートの道を歩いてみると、かすかにどこかで鐵砲の音が響いた。自動車のタイヤか、それとも御祭り気分な支那人の爆竹でもあるかと思はれたので、そのまま玄關へ來ると、まだその音は熄みさうにもなかつた。

『市街戦でも始まつたのかな？』

かう思つて聽耳を立ててみると、その音はどうもこの邸のどこからか出るらしいのが、身内に傳はるかすかな餘韻でわかつた。

田中は不思議に思ひながら、階段を昇つた。

『どうぞ、こちらへ。』

ボーイに導かれたのは、奥まつた書齋で、そこへ出るまでに、重い掛毛氈の垂れたいくつもの小房の前を通過した。

『さア、御這入りなさい。私——俄德です。』

濁りのない日本語で云つて、書籍の間から半白の頭をもたげたのは、一人の支那人の爺さんで、度の強い老眼鏡に擴大された瞳を、じろりと田中の上に留めたとおぼしめし、卓の傍の椅子をすすめた。ぎくしやくと田中が挨拶をし終るのを待つて、老人は事務的に用件に這入つた。

『林さん居りません。どこかへ行きました。崎山さん、これも先程友達の方と出て行きました。しかし、貴方の御話は承つて居ります。御用事でしたら、私から申傳へても結構です。』

田中は對手の流暢な日本語に安心して、ボーイの運んで來た茶を一口啜ると、報告にとりかかつた。『實は、崎山さんからは、別にこのわしに報告をしてくれえといふ御頼みはなかつたのですが——今日街をぶらついてますと、二人の密偵に出遇はしたのです。こちらにも、崎山さんからの御話もあつたので、出来るだけ林さんの言葉で、旨く化けたつもりで居りましたが、——さういふわけかどうかわかりませんが、その一人の奴の云ふには、カールトン・ホテルにはもうソニアとかいふ女は居らんし、



それさへわかつてるれば、勝手に陳獨秀とでもコレヴィッチとでも會ふがいい。ただ、この手錠を忘れるな、きつと捕縛して見せるぞ！ と、まあ、おどかすわけなんです。わしは、この事を、ちよつと林さんなり、崎山さんなりの耳へ入れて置きたいと思ひましてな。——それから、もう一つは、今後もやはりこんなことをしてゐていいのか、それとも、何かほかのことをするのも伺ひたいと思ひましてな。』

『ああ、さういふ御話ですか？ どうも有難う。よく知らせて下さいました。きつと崎山さん欣ぶことと思ひます。で、ここに、崎山さんが貴方あてに置いて行つた手紙あります。實は貴方の御出を待つてゐると云つて居ました。あの人非常に忙しいですから、ゆつくり貴方と御會ひ出来ないこと非常に遺憾であると云ふて居りました。これを御覽になればおわかりでせう。……』

老人の抽出から取り出した手紙は、洋封を嚴封したもので、手に取るとわりに軽かつた。

『ここで拜見してもいいですか。』

『よろしい。その方がいいです。』

『同志田中！』

此。二。七。日。夜。七。時。カ。フ。エ。ユ。ー。カ。リ。へ。御。出。を。乞。ふ。服。装。紳。士。風。費。用。は。俄。德。氏。よ。り。受。取。ら。れ。よ。入。口。から。奥。へ。三。ッ。目。右。隅。の。卓。に。掛。け。ら。る。べ。し。同。所。國。際。ス。バ。イ。の。集。會。所。な。る。こ。と。御。存。知。の。如。し。君。は、丈。の。低。い。肥。滿。した。ロ。シ。ア。人。と。會。ふ。コ。レ。ヴ。イ。ツ。チ。と。い。ふ。男。胸。に「C」字。を。赤。糸。に。て。刺。繡。せ。る。ハン。カ。チ。ーフ。を。挟。ん。で。る。左。手。拇。指。切。斷。さ。れ。て。な。し。その。手。に。て。英。字。の。名。刺。を。差。出。さ。ん。其。時。君。の。背。後。の。卓。に。在。る。一。團。の。支。那。人。は。敢。死。隊。で。あ。る。團。中。の。博。崇。震。は。流。氓。の。首。領、現。在。佛。租。界。警。察。探。偵。長。の。要。職。に。あ。り、コ。レ。君。及。び。林。幸。作。の。捕。縛。に。腐。心。せ。る。もの。と。す。彼。等。は。君。等。を。釣。り。出。す。べ。く、凡。ゆる。手。段。を。弄。せ。ん。よ。ろ。し。く。釣。り。出。さ。る。べ。し。英。語。會。談。自。由。但。し、泥。醉。を。禁。ず。敵。直。ち。に。射。殺。の。意。あ。ら。ば。萬。難。を。排。し。て。逃。走。せ。よ。但。し。一。應。警。察。へ。同。伴。す。る。由。に。て。自。動。車。に。同。乗。を。乞。は。ば。抵。抗。す。る。勿。れ！ 恐。ら。く。該。自。動。車。は。佛。租。界。警。察。本。部。ま。で。行。か。な。い。で。濟。む。だ。ら。う。酒。場。内。の。日。本。人。一。切。と。會。談。す。る。勿。れ。君。は。最。後。ま。で。林。幸。作。で。あ。れ。若。し。此。手。紙。期。日。迄。に。入。手。さ。れ。な。け。れ。ば、再。舉。同。計。畫。を。行。ふ。べ。き。で。あ。る。が、事。情。逼。迫。一。日。の。猶。豫。を。も。許。さ。な。い。の。だ！ 直。ち。に。準。備。に。着。手。さ。れ。よ。世。界。無。産。階。級。解。放。運。動。の。爲。め。に。堅。く。握。手。し。て、君。の。自。重。を。祈。る！ (此。書。讀。了。後。火。中。せ。よ) 崎。山。國。松』



繰返へして讀んだ彼は、英語だけは困つたと思つて三度目に顔を擧げると、俄徳老人がマッチを摺つたのに氣づいた。黙つて手紙をその上へ翳すと、レター・ペーパーの一端から變色するやうに火が移つて行つた。二枚の紙は、かうして切爐の中へ投ぜられた。爐の中には、丸太が燃えさかつてゐた。これは、普通毛皮や綿服を着込んで、火を燃やさぬ支那人の習慣とはちがふ。俄徳先生も、どこかちがつたところのある人間である。

『——では、これだけ差上げます。この分だけ受取り書いて戴きます。勿論、日本語で。』

田中の前に、一と累の紙幣が置かれた。數へて見ると、二百弗あつた。彼は云はれたままに、支那紙の野の中へ受領の旨をしたためた。

この一部始終の間、彼は、ちようど自分の足下にあたつて、しきりに地響を打つて傳はるピストルの爆發に耳を傾けてゐた。

『俄徳先生、あれは何ですか？』

『あれですか、どうも扉は密閉してあるんですが、まだ完全でないやうですな。御見せませう。糺察隊の若い連中が射撃をしてるんです。かう行らつしやい。』

促がされて、田中は帽子をつかむと、隅の扉から窮窟な地下室への階段を案内された。降りると銃聲が耳の傍で爆發した。重い扉をコツコツ敲くと、學生らしい支那人が内から開いて、叩頭した。

『運動會です。』

俄徳は應揚に笑つて、扉を締めきつた。

窓といふものがない、がらんとしたセメントの箱のやうな地下室に、十二三人の若いものがゐて、てんでにピストルの射撃を稽古してゐるのであつた。四隅にともつた電燈は、まだ暮れきらぬ午後の中に、すつかり夜のやうな氣分をあたへてゐた。どこかに通風装置でもあるのか、さほどセメント臭い空氣の籠りも感ぜられなかつた。前方に並んだ射的目標は、等身大の造り人形で、皮肉にも、××の〇〇〇〇や、蔣介石や、張作霖や、張宗昌などといふ反動政治家や軍閥らしい恰好をしてゐて、彈丸が中れば、彈機化掛で仆れるやうになつてゐた。しかもからだのどこかに命中すると、金錢登錄器のやうに、ぢやりんと鳴つて人形は前のめりに仆れた。チョークでラインを曳いたところから、目標まではおよそ十七メートルの距離があるやに見受けられた。

やつてゐるのを見ると、なかなか彈丸は當らない。嘲笑するやうな、くすんだ顔の人形は、彈丸が



その邊を掠めるごとに、ゴム製らしい手をゆらゆらと動かして、怪しげな陰影を壁に投じた。

『そら、軍閥！』

女學生らしい娘が、無表情な氣取つた姿態で、歩るきながらび——んと放つた一發が、蔣介石の腕に當つたらしく、人形は腕がれるやうに右手をゆすぶつた。

『鳴らせ！ 心臓を狙つて！』

一團のうちでも年嵩らしい青年が指揮した。

『赤色死刑！』

この大聲は、田中の傍にゐた俄徳老人から出た。

一人の青年が、無言で人形の一人を睨んでゐて、空中に大きい弧を描いたと思ふと、赤黄ろい火を吐いたピストルがぎくりとそれを持つた手を反射的に引戻した。張作霖の像がばつたり仆れると同時に鈴がちやりと響いた。老人は手を拍いた。

『わしにも一發やらして下さい。』

田中は思はず乗り出した。

年嵩の青年が一挺の青みがかつたピストルを渡した。田中は、隅の方に齒を剥いてゐる日本人の傀儡を暫らく睨んで突立つてゐた。

『支那から手を引け！』

一喝すると、彼れの手元のどこかからぱつと火が迸つた。びんぐ！ 頭蓋骨を鉢割られて、無言で斃れる怪物のやうに 齒を剥いた人形はぐにやりと地に伏した。しかし、鈴は鳴らなかつた。

『萬歳！』

青年達は一樣に囃し立てた。

地下室から田中を送り出した俄徳老人は、玄關で彼と握手する機みに、今使つたコルトの七連發をにやにやしながら差出した。

『差し上げます。彈丸は皆籠めてありますから——。』

眼鏡の枠から上眼使ひをした爺さんを見て、田中は、子供らしく眼を小さくして笑つた。

『いいピストルですな！』

邸を出て見ると、あれほどの反響も、街のどこにも聞えなかつた。ぐるりと邸の裏扉の方まで歩る



いて行くと、高々と築かれた支那壁の向ふに、タンクのやうな壁が聳えてゐるのが見えた。  
「なるほど、日本の運動と支那の運動ぢや建物からしてちがつてやがる！」

## 16、コレヴィツチ氏

入口から奥へ三つ目、右隅の卓

「入らつしやいまし。」

田中は、永安公司でみつけた、林そつくりなエロア帽を、そのまま額へ押つけて、指先で卓をこ  
とこと敲きながら、ドイツ・ビールを呼んだ。

恐らく近代人の感覺のうちで、身體のどこかにピストルを藏めてゐる時ほど、辛辣な皮肉を味はふ  
ことが尠からう。——その感覺は、随意にどんな男女の衣服をも脱がせて、氣の向くままに對手の力  
を評價することが出来る。その感覺の前には、自由を云々する暇がない。それだけ、さういふ感覺に  
ひたりきつてゐる常人には、餘裕と、選擇權と、ある程度までの優越感とが保留されてゐるわけだ。

田中は海賊のやうに眼を働かせた。

まだ目ほしい客らしいものは見えなかつた。奥の左隅にダンサーらしいポップ・ヘアの、ビュー  
ティー・スポットをつけた、引き眉毛のムスメと、タキシードの毛唐人が、櫻桃の光つて見えるグラス  
の前に踏み合つてゐた。男が手の指をばらりと擴ろけると、女はしきりに馬簾のやうな髪を振つた。  
折目の正しいエプロンに、身體の皮より三倍も白さうな白粉をつけた女が、うやうやしくビール  
を運んで來るのを、戯れにピストルの引金へ指を掛けて見てゐた田中は、その女が、

「今晚は、おひとり？」

と云つた途端に、彼女の張りきつた下腹部のちよつと左へ寄つたあたりに、圓い小さな孔があい  
て、葡萄酒のやうに流血する光景を頭の一角に描いてゐた。

「僕かね？」——田中は空惚けて見せた。「このカフェは、始めなんだが、仲々モダンだね、サーヴ  
イスが。」

「あら、——こちら、お忘れになつちや嫌ですわよ。出らつしたわ、すうつと前、ほら、あの御鬚さ  
んとお一緒に！」



女は軽く打つ眞似をして、今度は、その手に力を單めてピルスナーをどびどびと注いだ。

「さア、そんな筈はないと思ふが——そりや、君、人違ひだよ。僕ア今度始めて上海轉任になつたんだ。すうつと大連に居つたんだから、いくら君に惚れて居たつて、ちよつとここまでは通よひッコはないさ。」

「おかしいわね、あたし達滅多に御容さまの御顔を忘れやしないんですが。——ほんとね、さう仰白りや、どこかちがつてゐらつしやるわ。……でも、よく似た方があるもんですわね。」

「誰か知らんが、そんなに君の記憶に終生残つてゐる人にまちがへられるなんて、僕としても光榮の至りだね。」

「あら、嫌だね、こちら。そんな大した御容ぢやないのよ。新聞屋の破浪漢といつしよなんですもの、どうせ知れてゐるわ。ただ、あたし、あんまり似てゐらつしやるからよ。」

「さうかね、ぢや、僕もせいぜい君の情い人に似るやうに力めようや。」

「憎らしい！」

女は睨む振りをして、もう一度軟體動物みたいに空間を打つて、眼の前にビールを満たした。

「いらつしやいまし。お寒いのおビールでございますか？——豪傑ね。」

「上海は存外寒いね。」

「尿毒症」である。此女も案外あつけない死を遂げる女かも知れない。この前の時のやうに、客の前へ掛けようか掛けまいかとしてもまだ對手を突留め得ないので、不思議に朗らかな瞳を瞬つたまま、じいと田中の様子を窺がつてゐる。彼は、不圖、螻螂といふ蟲を思ひ出した。そして、この女の前で、曾つて自分が何を云はうとしたか、どんな態度でゐたかを考へてゐると——愕然として、

「酒場内の日本人一切と會談する勿れ！」

といふ崎山國松の警告を懐ひ出した。

「君達、今晚こゝへ商用で落ち合ふ客があるんだから遠慮して呉れないか？」

瞬ひとつせず田中の語韻に聴き入つてゐたとみ子は俄かに愛想笑ひをして、

「飛んだ御人違ひで、失禮いたしました。……どうぞ、御ゆるりと。」

と病的に白い指を揃へて、その上へ顔を伏せた。



二人の女は、バアの向ふへ行くと、そんなことを囁き合つた。  
田中は、内心ほつとしたのである。

その時、つかづかと卓の傍へ寄つて来たのは、崎山のインストラクションに要約されてあつたコレヴィッチその人らしい、無愛嬌な、鼻の大きい、肥満した猶太人であつた。

『ミスター・ハヤシ?』

『左様、ようこそ、ミスター・コレヴィッチですな?』

『少し遅くなりました、忙しいもので。』

左の拇指が關節のところから失くなつてゐて、差し出された名刺は、人差し指と中指とによつて器用に緋皮のケースから撮み出された。——今更のやうに、田中は、崎山の手紙が、その通りに實現されて来るのに驚いた。

『御商賣は如何です。』

コレヴィッチは、向ふへ掛けると、眼尻に小皺を漾へて笑つた。笑ひでもしないと、傲岸不遜な顔である。

『この戦争のため——御承知の通り——頗るいけないです。』

田中は、上海語の發音の眞似よりも、この英語の初等知識の應用にはへこたれた。

『おお、ミスター・ハヤシ、私日本語出来るですが——その方よろしい。では日本語で御話します。』

『But... What do you drink... beer or whisky?』

コレヴィッチは苦笑した。

『ウイスキー、よろしい。』

『おい、姐さん!』

田中が手を舉げた拍子に、どやどやと這入つて来た三四人の支那人のけはひがした。林の田中は、女中の注意を惹くとともに、手をポケットへ収めた。コレヴィッチはちよつと瞬した。

『何差上げませう?』

『ウイスキー——What whisky, Mister...?』

『Me for Haig and Haig, please.』

『ヘーグ・アンド・ヘーグ、罎ごと持つて来るがいい。』



別な女給が、背後の卓へ向つた。

『國民黨』とか、『抗州』とか、『外國租界』とか、がやがやしやべつてゐた連中の一人が、田中などよりもずつと達者な英語で、

『Whisky four. please.』

と註文した。

コレヴィッチは、眉毛一つ動かさずに、次のやうな事を英語で諄々と語りはじめた。その話の半ばには、カフェにも、次第に客の数が増して、正面の蓄音機が鳴り出すやら、女給と客との押問答があるやら、帳場の金銭登録器が鳴り出すやらして、話の六分通りは、昂奮した田中の耳に這入らなかつたのである。

『この間、ハンカウにこんな事件がありました。……それが娼婦であつたのです。……客といふのは、英國の海軍士官一人なんです。娼婦と云つても、稍ハイクラスの方でしたな。……金拂ひはよし、立派な男です。……屢々やつて来るのです。……軍艦は楊子江に碇泊してゐますし、オフ・デイには左程遠くない道をぶらぶら散歩しながらやつて来る。……どうも支那人の婦人には、西洋の婦人みたい

な感情といふものがないやうですな。……或る日、一疋の恐ろしい大きな犬を連れて来ました。……まあその邊のところはよくわかりませんが……一室へ婦人同道で這入つたものです。御存知でもありませんが、支那のベッドは天蓋がありカーテンが巡らされてある。……突然、婦人が悲鳴を擧げたのです。……例の猛犬がその室から飛び出す。……口笛を吹いたとかですが。……士官二人は犬と共に逃げたのださうです。……「クウ・クウ！」と云つて泣きながら婦人が後を追ひかける。……「クウ」といふのは「ドッグ」の意味ださうで……群集がその婦人のあとからついて行く……最後に河岸へ来て見ると、犬を連れた士官が軍艦をめがけて漕いで行くのです。……可哀さうな婦人は――』

『How do you do, Mister Colevitch?』

莞爾として、白面の青年が立つてゐた。

『おほう——ウリアム・チェーン君でしたか？ これは、これは。まあ、お掛けなさい！ 御紹介します。これは、日本の商會の林さんです。』



紫がかつた緞子の派手な馬褂を着た青年は、象牙のやうな光澤を放つ顔に、ほんのりと微醺を催してゐた。

『ウリアム・チェーンさんは、上海の銀行家です、林さん。』

田中とその支那青年とは、互に中腰になつて目禮した。途端に田中の股に挟んでゐたステッキが、コンクリートの床を敲いて仆れた。如才ない支那人は、慌てて二人を押留めた。』

『どうぞ、そのままに。——實は、友達が三人ばかり来て飲んでゐるものですから。——どうもかういふところで御目にかからうとは思ひませんでしたので、失禮いたしました。』

コレヴィツチは取りなし顔に、拇指のある方の手で椅子を押し薦めた。

『まあ、どうぞ。一杯いかがです。何なら、その御友達の方も。』

『どうも喧しい連中ではないですか。』

『いや、構ひません。林さんも私も、ちよつと商賣の打合せ方々ここで落合つたわけで、もう話も濟んだところですから、ゆつくり御近づきになりませう。』

『左様ですか？——では、御言葉に甘へまして。君、程君、齋君、金君も、ちよつとニュー・ヨーク

の金融王に紹介するから、ここへ御出で。』

女給が椅子を運び、新しいグラスとタンサンのサイフォンを持つて來た。程、齋、金の三名も、それぞれ支那流に秀でた容貌の持主であつたが、物々しい洋服を着てゐるところだけは、場所柄どうやら一段と格が落ちてゐるやうに見えた。その最後の金といふ肥つた男は、どこかで見たやうな記憶があつたが、どうも田中には思へ出せなかつた。

一同は十年來の知己でもあるかのやうに、きはめて打溶けた。

『これが敢死隊かな？』

さういふ眼付をしてコレヴィツチを見ると、彼は思ひ出したやうに、田中の方へ話を向けた。すこし酒が廻はつたらしい頃に、ウリアム・チェーンと呼ばれた支那人が、腕時計にちらと眼を濺いで云つた。

『如何です、御二人とも、御久振りですから、ひとつ純粹の美しい妓達のゐるところへ御案内させて戴けませんかしら？ ほんたうの支那をごらんに入れませう。』

『林さん、如何ですか？』



「さア、僕達日本人の禮儀としまして、一應は辭退することになつてゐますが、」

「御差支なくば、チェーンさんの御招待を御受けしようぢやありませんか？——ほんたうの上海を私も拜見したくてしようがないのです。」

「特に女はですか？」

チェーンは、巫山戯た口調で、コレヴィツチの肩を叩いた。老人は、にやりと笑つて、好々爺らしく皮の財布から十弗紙幣を二枚抜いた。田中は、紫の上衣に颯と鮮血のほとばしる光景を頭に浮かべた。

「では、もう一臺自動車をさう云ひませうか？」

洋服の一人が訊ねた。

「さうだね、五人、運轉手一人と、——私のリムウジーンで大丈夫だらう。よろしい。」

田中はこだはらずに立ち擧がつた。立つた拍子に、左の壁際の卓から、

「おいッ！」

と呼ぶ者があつた。

豫めそんなことだらうと思つてゐた大友であつた。實は最前ちらと這入る時の横顔を見てはゐたのである。何を思つたか、大友の奴、すつかり頭髮と鬚鬚を剃り落して、にやけた風に七分三分になど頭髮へ靴墨のやうな油を塗たくつてゐた。

これは省略してもいい客人だ。

五人はホテルの外へ出た。

何かを囁くと、運轉手は、ちよつと擧手の禮をした。

「はッは、この男、この間まで軍人のシヨファをしてゐたもんで、まだ軍隊式な敬禮をする癖があります。」

ウリアム・チェーンは、口を開いて笑つた。田中は、混み合つてピストルが同席の支那人に當るのを恐れて、隙を見計らつて、旨くコレヴィツチと並んだ。車は走つた。

上海のシヨップ・ライトは、黄金の簾を長く長く曳いたやうに、どこまでも續いた。處々に印度人巡警の眼だけが光つて、自動車は交通整理のために停車させられた。時局柄八時には、通行人の數も



減ることにはなつてゐたが、その代り自動車や黄包車の数は決して日晝と變りはなかつた。知らない都會の夜を自動車で疾驅するほど、夢でいろいろな場所を歩くのと似たことはあるまい。光から——闇へ——光へ——大きい壁の横へ——遠くの光の屑へ——平凡な町角へ——そして闇へ。際限なく同じことがつゞいた。終ひに、田中は、あまりに眠氣が催して來るので、もしま、何かの機みに、博崇震の奴が魔睡劑でも入れたのではないかを怪しむた。

不圖、コレヴァイツチの硬い腿がぐいぐいと自分のを押してゐるのに氣がついた。

「ストップ！」

車がぎくりと停まる。はつと眼を開いた刹那、横合から一道の青い光が閃めいて、斜に車内を射貫いた。

「皆手を舉げい！」

これははつきりした支那語であつた。

自動車のヘッド・ライトの前を曲がつた脚が動いて、官服を着た巡警の一團が、すつかり車のまわりを包圍してゐた。

「車を降りろ！ 手を舉げたはまだ！」

真先にウリアム・チエーンが低い聲で唸りながら下車した。

「こらッ！」

誰かが大喝した。

洋服の一人が、帽子を落して車内に踞んだ時である。

巡警の数は十人ほどであつた。その二人は、英國兵みたいなライフルを構へてゐた。

六人は順々に、サイドウォークから鋪石の上へ整列させられて、一人一人嚴重な身體検査を行はれた。

「冗談もいい加減にしろ！ 貴様等、俺を知つてゐるか？」

「黙れ！ 騒ぐと生命がないぞ！」

「こいつ、俺が——俺の職業が何だと思ふ？」

巡警の一人は手痛くチエーンの横素頬を殴つた。

「やかましい！」



「博崇震探偵長だぞ、おい、仲間、何を感ちがひしてるんだ？」

洋服の一人が情なささうな聲を立てた。がちやりと博崇震の内懐から二挺のピストルがアスフルトの上へ投げ出された。

「博崇震がどうしたといふんだ？——よし、同志達、これでいい。この三人を再び自動車へ乗せて龍華の原つばへ連れて行つてくれ！ その場での行動は打合はせの通り、斷乎として執行してくれ！ 同乗者は、君達四人。それから、この運轉手だが、お前は生命だけは助けてやる。徒歩で歸へれ！

——いいか、同志達、途中で抵抗するやうだつたら、臨機應變の所置を執るんだぞ！」

コレヴィッチと並んで立つてゐた田中は、急速力で自動車のヘッド・ライトが闇の中に消えたのを見受けた。すると誰かが銃の臺尻で、運轉手の身體のどこかを強たかに毆ぐりつける音がした。

「歩くけッ！ 何をまごまごしてやがるんだ。撃つぞ！」

運轉手らしい姿が、鼻を啜り上げて、ぐどぐど云ひながら、うつそりと闇の中へ消えた。残つた巡警の一團に、マツチを摺つて煙草に火を點じたものがある。

「やア、崎山さん——！」

「田中君か、御苦勞だつたね。——つまらん芝居を打したりなんかして……」

コレヴィッチは、田中の脊へがつしりした手を置いて、のろのろと歩きながら、崎山へ告げた。

「この青年、信頼すべき同志です。想像されたほどのルンペンではない！」

田中は、闇の中をちぐはぐな足取りで歩を運びながら訊ねた。

「あれは、どうするんですか、あの博といふ奴は……？」

「O——In, them dogs, they're gone to thier hell of kennel——not to come back any more, see !」

コレヴィッチは、稍鼻にかかつたのん氣な言葉で、かう説明した。

暫らく歩いてゐると、支那人の一人が、突然何かを思ひ出したやうに、叫び出した。

「なあ、これで同志洪震の警も打つたな！」

パンの背のやうなごろた石の上に、紅い血の糸が低い方へ低い方へと流れたのを瞞めてゐる日の光景が、この瞬間、田中の眼にハッキリと映つた。斃れて空を掴むと、「……萬歳！」と叫んだ男が、その洪震だつた！

それで、先刻から、どこか見覚えのある人間だと、思ひ感つてゐた金といふ奴の素性もはつきりし



たわけだつた。  
一同は黙々として、歩るきつづけた。

## 17、人間の洪水

義豊里の流言蜚語といつたら生やさしいものではない。

朝起きると、古來からの傳統でもあるかのやうに、長いささらをもつて、糞桶を女房達が、がらがら水を入れて引つ掻きまはす時に始まつて、この電燈に恵まれない袋小路に、めし屋のカンテラが最後の光を閉ぢてしまふまで、この町の女達は、殆んど食ふことと眠る時間を除いては、烈しい舌端の運動に一日を費した。

ふだんは、棺桶屋の嬢あがしみつたれだとか、禹平珍が女房に甘くていつもなめられてゐるとか、めし屋が巡警と喧嘩して、残飯の袋を大道へぶちまけたが、喧嘩が過ぎてから大急ぎで手摺みに袋へ入れたのを見たとか、『リヤング』が荷揚げに出るときつと米の五升ぐらゐるはちよろまかして來ると

か……さういふ噂さがその大部分を占めるのであつたが、今日びは、このうすほけた裏店の嬢どもも、めし屋へ集つて憤慨する苦力達の眞似をして、上海の政治らしいものを口走るやうになつてしまつた。

と云つて、何も彼女達が、五省聯盟がどうしたとか、孫傳芳が負けたとか、張作霖が對赤聯合軍總司令になつていよいよ南下するとか、上海特別市市民公會は中國共產黨の尻押しで成立したとか云つて天下の形勢を談ずるのではなくて、ただ上はずつた調子で、夢に魘されるやうに、昨日は北四川路の大通りを灰色な服を着た軍隊が朝から晩まで通つて行つた、一昨日は書生の身装をした間者が市場の横で銃殺された、四五日前にはどこかの工場へ金持ちからどえらい数の旗の註文があつた、それが今までの旗ではなくて、青天白日滿地紅旗であつた、わるくしたらここ二三日で上海が、革命軍と北の方の軍隊との激戦地になるだらう……かういふ、見たこと見ないことの限りを、彼女達獨得の空想にまかせてすつかり現實化してしまふと、昔からこの袋小路がやつて來た通り、そつくりそのままを他人へ大聲で譲り渡すのである。

ことに、六軒長屋の苦力達の手足の動く奴がすつかり出拂つてしまつたあとでは、急に男つ氣がなくなつた關係上、居残つた男達よりも數の多い女の方がその局に當つて、この街を出た廣い世界の



出来事を、よく考へ、よく判断する責任を持つやうになつたのは自然の結果でもある。さうすることは、彼女達の一身一家の安定とも重大の關係をもつてゐた。——それに、どちらかと云へば、不安を感じた時は、一刻も早くその事を、ほかの不安を感じた連中と話しあつて、氣持を分け合ふといふことも、幾らかその不安を軽くするといふことにはなつた。

かういふ噂の底に、何遍も蒸しかへされ繰り返へされるあとでも、たつた一つ根強く残つてゐた懸念は次のやうな事柄であつた。

「今にこの街も、きつと兵隊に襲はれるよ！」

ただ、人によつて、その兵隊が南軍であるか、北軍であるか、それとも西洋人の兵隊か、もしかすると東洋人の兵隊であるかがちがふのであつた。どちらにしても、まだ松江に叛旗を翻へした夏超軍がぐづぐづしてゐて、安國軍直魯聯軍宣講部などといふ小やかましいものが、反共産黨宣傳に掃除しきれないほどに上海の街をビラで汚してゐた今日、はつきりそれが見透せるぐらゐならその人間は、こんな裏店になど糞桶を洗つてゐる筈はないのだ。

ところが、義豊里の賢明な嬪どもの豫感とは別に、この街は、一日、まつたく思ひがけないものに

襲はれてしまつたのだつた。

それは、何處から來るともなく、留度なく流れて來る窮民の群で、何も持つてゐないと傲語してゐるこの街のブロンタリアよりも、もつと何も持つてゐない人間の群だつた。戦争のために家を焼かれ、占領した軍隊の掠奪にあつて、命からがら逃げ出した村や町や小都會の人間が、二十人、三十人と弱い家畜の群のやうにかたまりあつて、そこちから落ちあふと、しまひに何萬といふ大きい人間の洪水になつてしまつたのだ。この群集は、始めは小金を持つてゐたり、着物を背負つて出たりするのであつたが、歩いてゐるうちに、一つ一つ身につけたものを賣り食ひして、襤褸と空腹だけになると、もう何も賣り拂ふものがないので、女の子から賣りはじめ、しまひに長男や、妻をまでも賣り拂つてしまつて、一番安全だと思はれる大都會へ着いた時には、人間の家族としての最もエレメンタルな數しか到着してゐないのであつた。

その朝、あらめのやうな襤褸を下けた、幾日も顔や手を洗はない、野鼠のやうにうす汚い男や女が、義豊里の門壁の前に眞つ黒になるほどたかつて來たのであつたが、そこでがやがや議論をしてゐるうちに、氣の早い連中は一團となつて、病院のある廣い通りの方へ行つたあとには、騒ぐ元氣もなささ



うな老人や女や半病人などが、一人潜り込み二人腰をおろすと、それが次第に数を増して行つて、小便臭いごろた石の上へ寝そべつたり、空地の塵埃の山を寄つてたかつてほしくつたり、人の顔を見ると何も云はずにわつと泣き出したり、しまひには、めし屋の前へ来て陸へあがつた魚のやうに口を開いて両手を合せ、地べたへ額をすりつけて恵みを乞ふのであつた。禹平珍の家も、棺桶屋も、綿屋も、苦力長屋も、人間の影の見える家ならどこもかしこも、この連中にとつては拜み倒しの對照とならないところはなかつた。

朝から晝へかけては、まだ人間には幾分の忍耐力がある。しかし、そろそろ日が傾きかけると、貧乏人はむやみと氣が短くなりがちなものだ。街に充滿した、乞食よりも零落したこの群集を前にして、街にゐるだけの男女が緊急にその對策會議を開かねばならなかつた。それには、この頃は商賣が繁昌しないで悲觀してゐる繪双紙屋の爺さんが、一番恐慌を感じたらしくかつた。

「あ——ア、中國は亡びるわ！ かう餓民が押し寄せるやうでは、上海も、戦争になるか、大火事になるか、それとも申江の水が倍高くなつて、人間といふ人間をすつかり海へ運んででも行かうかい！」この憂鬱な空想を開會の辭として、かれこれ四十人ほどの人間が禹平珍の職場に聚まつて、わいわ

いしやべりながら、誰が一番大聲を出し得るかを競争するやうに、勝手なことを云ひ合つた。

「警察は何のためにあるんかね？——訴へな。かういふ時にこそ巡警なんて役人があるんぢやないか！」

これが、日頃はいやがられてゐる、棺桶屋の嬢の動議であつた。

「警察だつて、これを追つ拂ふにア容易なことぢやない。何といふかね——この街の天災だよ。黙つて明日まで何もやらないでおけア、どこかへ行つちまふさ。」

と云ふのが、めし屋の張安溪の嬢の宿命論であつた。

だが禹平珍の女房は、もつと苦勞性だつた。

「投つといつて見ろ、明日までにア、五人と死人が出るよ。……あの菜つ葉みたいな顔を見ろよ、わたしは今まで腹のへつた男を何度も見てゐるが、あの面は半分死んでも同じだよ……。」

「と云つて、お前さん、百人も百五十人も、ああやつて一と晩中うなつてゐるんぢやあ、こつちとらあ眠られやしねえぢやないか？」

これは女房の意見を反映した棺桶屋唐通齋の言葉であつた。



「さうよ、あれで、まだ表に人通りがあるからおとなしくしてるものの、もう少したつて見ろ——暴動を起すぜ、悪漢ども！ さうなつたら、死にもの狂ひだ、俺達あどうなるかわかりあしない。だから、俺は、この際、皆で出来るだけの錢を集めて、この街にアこれしか金がないんだから、これを皆やるからもつと金持ちのゐる街へ出て行つてくれろと——おとなしく頼むのが最上だと思ふよ。」

人のいい禹平珍は妥協的だつた。

「腹アへると、人間はどんな事をしでかすかわからんからな。けだものに還へるよ！」

繪双紙屋の老人が、うめくやうな低聲になつた。

この會議の間も、店を遠巻にした、眼ばかりぎよろぎよろした、顔の皮が鼓のやうに乾枯らびた男達が、長い髪を掻き分けて、こちらの模様を探ぐるやうにじいつと覗き込んでゐたのである。それから、壁に凭れて眠つてゐたと思ふ老人が、突然立ち上つて、仲間を掻きわけると、よろよろと店先へ近づいて、鳥の啼くやうな聲を絞つて、咽喉の突き出た邊へしきりに手をやつたりした。極度に腹がへると、かうして狂人になるのかもしれない。さうかと思ふと、子供を抱いた女がつかつかと出て来て、いきなり鋪石の上へ額をぶつつけて、疵から血の流れるのも我慢しながら、

「何か——何でもいいから、食はして下さいな。この子供は二日も乳をやらないから、もう死んでます！」

と蒼黒い赤ん坊の額を血みどろな指でさして見せるのであつた。

この二三日は、崎山から與へられた英語の本を、辭書と首つ引きで研究してゐたので、滅多に外出することのなかつた田中は、一部始終を二階からそれとなく窺つてゐた。そして上海へ着いた日に、自分が大道へ銅片を撒き散らしたことを思ひ出して、ひとりでぞつとした。——事實、この小百人からある餓民に、一掴みの錢を投げてやつたとすれば、忽ちこの袋小路に掠奪が始まらないとも限らない。この群集の前には、少しでもものがあるといふことは、彼等の原始的本能をそそることになるのであつた。——と、云つて、現在このとほり、一方あきの街が蠢めく死の壁のやうな人間どもに包圍されてゐるとなると、それをどう切り開いて行くか？……

田中が焦心り出して、擦り減つた階段を下りて行つた時には、腕つぶしの強い張安溪が、めし屋一流の暴力説を説いてるところだつた。

「——片つぱしから、天秤棒かなんかで叩き出しちまへ。それに限る！ 商賣も何もこれぢアあがつ



たりだ、畜生！」

田中は、しづかに禹平珍の肩をゆすぶつた。

「どうだね、禹平珍、あの連中にこの街を出て貰ふ工風として、警察へ行けば甘いものが只で食へると云つてやつては？ それに、お前、警察では只で泊めてくれるんだし、掛合へば仕事だつてくれさうなものぢやないか？ しかしそれをね、こつちで教へこんだやうにしないで、自然とさう感づくやうに仕向けるのが手だよ。……あんまり疲れて弱つてゐるから、そこに氣がつかないんだよ。」

四五人の顔が、やつと田中の云ふ意味を聞き取つて、理解で明るくなつて行つた。

「そりア、ええかも知れん！ 警察は泥棒と人攫ひだけを取り締まるに限つたものぢやないよ！ 東洋の云ふことは本當だ！」

まつ先に、棺桶屋の嬢が、田中の皮肉をはきちがへて賛成した。

「東洋の云ふことは、一番賢いことだと思ふな。——すりあ、こつちも腹を痛めずに濟むといふものだ。」

禹平珍の嬢も、熱心に田中の説を支持した。

「——ふむ、それで野郎ども引き拂ふもんならな。」

これは、躊躇しがちな張安溪の言葉であつた。この男の暴力主義も、いつの間にか妥協的になつてしまつてゐた。それもさうだらう。この街からあれだけの人数を追拂ふには、野良猫を追拂ふやうに容易いものぢやなかつたし、それに、そろそろ晩の買ひ出しも迫つてゐたのだ。そこで、彼は、さつきからの鬱憤のやり場を見つけるやうに、犇々と戸口へ集まつて來る餓民達を睨みながらかう云つた。

『よからう、東洋！ うちの小僧に云はせようぢやないか？ 彼奴ならきつと盲くやるぜ！——さうだ、あの門口のところで、野郎にそつと喉かさせるんだね。』

満場一致といふわけにはいかなかつたが、とも角、この袋小路の利己主義を挑發することによつて、田中の意見は、大部分の女達に採用されることとなつた。それが、殆んど満場一致に近かつたことは、男の勢力の削減されたこの頃としては無理もなかつた。

そこで、群集を押し退けて、勇敢なめし屋の亭主が、店の奥に震へたる小僧を説得する段になつた。暫く經つと、禹平珍の店に集つた連中は、小僧が肢をくぐるやうにして表へ飛び出し、飛び出し



てからも、幽霊のやうな手つきで前後左右から追ひ縋がられるのを振りきつて、やつと門壁の向ふへ逃げのびたのを夕陽の下に見定めた。

どう感違ひしたのか、小僧はなかなか門口へ戻つて来なかつた。

と、そこへのつそり一人の巡警が姿を現はして、櫛の棒を揮りながら、何やら大聲で門口にぐたりとなつてゐる連中へ命令するのが見えた。

一人が立つた。續いて、二三人がそのあとに従つた。すると、よほよほしてゐた連中も、自分の耳を疑ふやうにその方へ首を傾けて、二三歩づつ寄りつどつたと思ふと、俄かに總勢が我も我もと門壁の下へ押しで行つた。巡警は、棒を振り振り、病院のある廣い街の方を指さした。

今まで割れ返るやうな騒ぎであつた義豊里は、潮が退いたやうに、群集の一人も残さずに吐き出してしまつた。

『や——れ、やれ、すつかり居なくなつた！ 驚いたな！』

誰が云ふともなく、眞つ暗くなつた店の中で、かういふ聲が聞えて、深い吐息がいくつも折り重つた。

『まだ、あかりをつけるなよ。』

今度は巡警も、薄闇の中を大股に消え失せた。そのあとへ、ほつんと小さな影法師になつて小僧の姿が残つた。どこかに、遠い群集のどよめきがあった。それが、向うへ行くのか、こちらへ引返へして来るのかわからなかつた。小僧は、急に弾機人形みたいに手足を振ると、ばたばたと鋪石の上を引返へして来た。

『門を、門を締めろ！——門を締めないと大變だぞ！』

その聲に驚かされた一同は、あたふたと駆け出して、すつかり錆びついた鐵の柵を力づくで押し立てた。幸ひと、眞ん中を縛る鎖と錠とが禹平珍の仕事場にぶら下つてゐたので、皆はやつとのことと、外部からの通行を遮断することが出来た。

とつぷりと暮れきつた大通りを、遠くの方から、わ——ツ、わ——ツとわめいて来る群集の聲に應じて、大通りの店が慌しく大戸やいとみを閉ぢる音が方々に聞えた。

『お前、巡捕へ何云つた？』

張安溪が、小僧の耳を引つぱりながら訊ねた。彼は南京米袋を肩にして、出ようか出まいかと苛立



つてゐたのだ。

「おらア、おつかなくて何も云はれはしなかつたよ。困つてると、あの巡捕が来て、俺がいいやうにしてやると云つて——外國人を追つ拂へ、お前達が食へないのは、この中國に毛唐や東洋の軍人がゐるからだ、大聲で云つたのさ！」

「さうか？——巡警も、近頃は月給が貰へねえんで、皆ヤケクソになつてやがるんだな！」  
棺桶屋がさう云つて、寒むさうに手鼻をかんだ。

「來るのかい——こつちへやつて來るか？」  
めし屋は小僧を詰つた。

「旦那出て見ねえな——おいらア、嫌だ！」

「この生意氣めが！」

「だつて、旦那は、いつも強さうなことを云つて威張つてゐるぢやねえか！」

「場合がちがふわ。先方は百や二百人ぢやきかねえんだ。……ええッ、この分ぢや、今夜は、買ひ出しは駄目か！」

そこいらで、女房達の一人が田中のことらしく、こんなことを噂した。

「東洋人だつて、あの東洋は軍人ぢやないから——安心だよ。」

田中は次第に近よつて來る不穩な騒音の間から、その言葉を聞いて、内心擦ぐつたい思ひがした。その時、

「東洋人！——東洋人！」

と慌しく田中を呼ぶ聲がした。

屹と表の方を見ると、蝙蝠のやうに鐵柵に吸ひついて、こちらを窺つてゐる一人の男があつた。

「あら、向ひの苦力だよ——この男、まア歸へつて來たんだよ！」  
棺桶屋の女房が叫んだ。

人を押し分けて田中が近づくと、

「門は開けなくていい。これだ。早く讀んでくれ！」

とその男は云つて、鐵柵の間から手を入れて、押しつけるやうに一封の手紙を田中の掌に握らせた。——青い、尖がつた顔をした、赤い腕章を巻いてこの街を引揚げて行つた苦力である。



「返事は？」

「返事不要——俺はただ傳令だ！」

この言葉を残して、腕章は鼠色の支那靴の裏を見せて、どこかへ消えてしまった。

「直ぐに俄徳方へ来たれ。崎山國松」

マッチ一本で読み下せただけの文句であつた。彼は部屋へ駈け戻ると、身につける物だけをつけてすぐ出て来た。

「おい、門を開けてくれ！——俺は用があるんだ！」

錠がはづされ、鎖がざらざらと地を曳いた。錆びた悲鳴をあげて、柵が開いた。

「さよなら、御機嫌よう！」

田中は、心にさう云つて、鐵柵に擱まつてゐる連中を見かへつた。

一同は、わざわざ閉ぢた門をあけて出て行く無謀な日本人を、呆れた顔をして見送つた。

### 18. 田中功と林幸作

林幸作である林幸作は、林幸作を名乗つた田中功に對して、軽い反感を抱くやうになつた。重要な會議が一段落つくと、きわだつて、仲間のうちに自分の名前が有名になつてゐるに氣がついた。

よく考へると、それは、田中功の仕業であつた。

なるほど、一時は、身代りの人間を立てて、蔭で參謀格として働いてゐることは、一舉兩得のやうにも思へたが、——そして、事實上、支那人や日本人のスパイの眼からは道が、工部局の官憲に追跡される憂ひもなかつたのだが、さういふ張りつめた時期とは別に、人間には消極的な個人主義的なモメントがよくあるもので、その場合、

「あの男、あんまりやり過ぎないといいが——。」  
といふ懸念も持ち得るのである。



それが、田中功が活躍すればするほど、ますます増大することも領られる。

更らに、林幸作と雖も人間である以上、その懸念を別な半面から延長してみることもある。

『いつか、あの男のために、林幸作といふ奴は、あんなヨタ者だつたのかと云はれませんか？』

何氣なく内部の者が、

『今に、あの男は、多少のルンペン性さへ清算すりや、立派な闘士になるぜ！』

などと賞めちぎるのを聞くと、すこし内証しかけてゐた氣持へもつて来て、その言葉がぐつと觸るものなのである。

『今に本物の林幸作よりも、贋物の林の方が立派な闘士になるぜ！』

かう先方が自分を嘲けてゐるやうにも取り得たのである。

いづれにしても、この不自然な自代り一件は、行きつくところまで行きついて、矛盾の正體がすこしづつ曝露して来るやうに思はれたのである。

それだけではない。過渡期に於ける無産階級運動者の生活として、當然期待しなければならぬ外部からの抵抗——彈壓や、スパイヤ、死の恐怖や、あらゆるブルジョア機構の刺との引つかかり——は、

一面、苦痛のあらゆる形のあらはれであるが、それが苦痛であればあるほど、その闘士の勇氣と、決斷力と、叡智と、犠牲的精神とを鼓舞し刺戟するものであることは否定出来ない。スパイヤとの探ぐり合ひ、足下に石を削る流彈、屋根を傳はつての遁走、同志の面前に於ける果敢な行動、未組織大衆にむかつての火の出るやうな煽動演説……これらは、世界のプロレタリア運動に於けるじみな建設的な半面に對比する、實に華かで、勇壯で、冒險的で、ローマンティックな他の半面である。

黙つて考へたり、人に知られずにローラーを押ししたり、忙しく封筒を書いたり、傳票の文撰をしたり、空腹を忍びながら重い荷をかついだり、二年も同じ工場に集中して思ふやうな成績が擧がらなかつたりするよりは、さういふ澄澗とした表面的鬭争生活をつづけた方が、どんなに名前が知れ亘るか、どんなに押しが利くか、そして、又、人間本來の社會的功利性の一部分を満足させるか、それは云はずと知れたことである。さういふ華々しい活躍が、よし失敗に歸したところが、失敗者は自分で自分を慰さめるものを十分に持つてゐる。それから、他人も、仲間も、同志も、決してその失敗の結果だけを批評して動機の純潔であつたことを忘れようとはしないのである。

それを、今、林幸作となつた田中功がやつてゐる。



そして、林幸作である自分は、幹部であつて、いろいろな争議の指導や、資金の工面や、政治的聯絡や、外國のプロレタリアとの交渉に従事してゐるとは云へ、主としてその活動範圍は奥まつた密室内だけの話で、そこに目新しい刺戟や、フレッツシユな闘争性を挑發する抵抗が感じられないのだ。

それも、林幸作といふ人間が、もともと理論家であつて、實際の動きに關係しない人物であつたら、自分の建築や策戦が實現されることだけを見て、大體の指導的立場に満足してゐるのであるが、彼と雖も、再度のロシア行から、二度も失敗を繰返へした日本の運動に今後大いに活躍しようとしてゐる矢先であつたし、現在の支那革命にあつても、上海工人代表と云つた表向きの關係はなくとも、總工會顧問たやうな格で、中國共產黨幹部と交際してゐるのだから、今後のことを思ひ合はして、尠からず、崎山國松の機智からちよつと肩代りを無名の一ルンペンに頼んだことを後悔してゐるのであつた。

『おい、崎山、あの田中といふ男を、廢めてくれんか？ 實はちよつと困るんだが……』

或る日、彼は、いつしよに珈琲を飲みながら、差し向ひの崎山にかう打明けた。

『もう澤山か？』

同志崎山は、兼ねてから豫期してゐたやうに、難なくその問題に這入つて來た。

『俺も、今度は一と働きして見たくなつたのでな。』

『しかし、お蔭で、一人の同志が獲得出來たからいいぢやないか？——ありや、ほんのルンペンでね、最初はどうかと思つたが。』

『——ふむ、もうあの會議さへ終はつちまへば、當然今度は俺が正面へ出ないといけないと思ふから。どうだい、さつぱりとあの男に運動から手を引いて貰つちや？』

『と云ふと、一端階級意識を持つた人間に逆戻りをせいといふことなのか？』

崎山は、思つたよりも根強く田中の肩を持つた。

『さうは斷言しないが——だが、現在の運動の局面から見ても、あの男のために僕が不自由をするといふ馬鹿氣話があるか？ だから、あの男に、一つ日本へでも歸へつて貰つて……』ここで、林は、一つの天啓的な智慧に思ひついて手を拍つた。『さうだ！ 僕の身代りにして、日本へ送り還へすさ！ これや妙案だらう？ その位の犠牲的精神を持つてくれるのは當り前ぢやないか？——どうせ正式黨員ぢやなし……』



崎山は、暫らく黙つたままシガレットを喫つた。そして、再び口を切つた時には、いつもの齒で噛みちぎるやうな、威つい鐵片のやうな言葉は吐き出した。

『同志林幸作、君は幹部で、指導理論家で、経歴もあり學識もある。一應君の自尊心は認める。運動もそれを認める。第三インターナショナルの東洋部だつて、大いに君に囑望してゐることは知つてゐる。——しかし、さう云つちや失敬だが、日本の運動では、君はまだ中幹部どころ位までしか伸びてゐないぢやないか？ どうせ、今度は彈壓は食ふだらう。それは覺悟だ、だから正面切つて君が立たないならんとは自信してゐるんだ。——だが、林、この問題は別だと思ふな。君の主觀的な方面の整理は結構だが、この一人のルンペン・プロレタリアが、どういふ経路を踏んで、ともかく支那革命の前線にまで浮き上がつて来たといふことを考へなけりやならんと思ふよ。同じやうなルンペンが日本にはうちやうちやしてゐるんだ。いいか、そこで問題が客觀性を帯びて來るんだ。黨を支持したい、黨に参加したい、——さういふ無言の聲を嚙んでじつと見てゐる未組織大衆の代表者があの田中なんだ。僕等はさういふ階級層を放つとして、幹部だけの運動をいい氣になつて、一言の下に彼等をルンペンと云つて蹴けるとしたら、黨は孤立する！ 運動はこの十一月廿四日の上海暴動みたいに獨りよ

がりになるんぢや。——僕は、君がさういふ見方をしやしないかと、内心實は惧れてゐたものだ。いいぢやないか。もともと君の身體が大事だからこそ、あゝいふ工風も獨りでに湧いたやうなものだ。投つとして、君は君でもつと重大な仕事をしてくれ給へ。』

『うむ、さう云はれりや、それもさうだが……奴、いい氣になつてへんな誤謬を犯したりなんかしやしないかと思つてね。』

『まあ、そんな心配もあるまい。當人は一生懸命になつて働いてゐるんだし、僕も見てゐるから。——だが、これは、やはり僕一存の考へぢやいかんから、一つ當人を呼んで意志を訊いて見ようぢやないか？』

『妙な對決だな……。』

『僕に任しといてくれ。』

田中功が呼び出されたのは、さういふ理由からであつた。



「君は、いつまでも僕の名前を名乗つてゐたいかね？」  
むき出しに林は、田中へかう訊ねた。

「さあ、あんまり好きでもないね。——實は、林さんの振りをして、あんたみたよな言葉を使つてると、窮窟でしようがないんでね。」

「どうだね、今までは非常に君のお蔭で助かつたんだが、これからは一つ綺麗に運動から脚を洗つちあ？——」

これは、皮肉な顔をした崎山の質問であつた。

「あんた方は、まるで警官みたいなものの云ひやうをしなさるね。驚いた。階級意識といふものは、そんな芝居で使ふ銀紙の刀みたいなもんぢやないですよ。マルクスとエンゲルスの共産黨宣言を讀んで御覽……」

林は苦笑した。崎山は慌てて田中を遮つた。

「いい、その話はわかつてる。——實はね。君がその氣持ちなら、日本の本部へ紹介して上げるが、一應向ふで正式な黨員となつて活動してみたらどうかと思つてさ。尤も、途中長崎か門司あたりで、

林幸作と間違へられて掴まるかもしらんがね——。」

長い沈黙ののち、田中は悲痛な顔を上げた。眼にはかすかな潤ひさへあつた。

「いやだ！ 俺あ日本へは當分歸らない。そんな手続きや、資格の問題がやかましいんなら、あんた方の手を煩はさずに、獨りで浦東の苦力の中へ入つて、俺の知つた限りの宣傳をするよ、煽動もするよ、運動もやつて見せる！ しかし、その時は、今こそ頼まれて下手な役者をやつてるが、林幸作なんてえ幹部の名前は御免蒙る。生れたてのほやほやの田中功さんでたくさんだ！」

「よし、田中君、君の氣持ちはよくわかつた！ もうその上の意志表示は必要がない。——どうだ、林、僕の云つた通りだらう。で、結局どういふことにするかな？」

「……僕が、僕が間違つてた！ 話の出發點が良くなかつた。しかし、これには崎山、君だつて多少責任もある話だ。三人で相談して、何とか解決の方法を見出さうぢやないか。」

「ぢあ、かうしたら如何ですか？ わしはあんたの名前をさらりと棄てませう。そして、その代り、あんた方とはもうこんな事でお交際はしない。わしは、これから支那人になつちまふ。なれなかつた



て、なるさ。そして、革命の機運が成熟してゐるこの上海で、わしのやる事はいくらでもあると思つてゐる。と云つて、何も支那人だから偉いとか、日本人は氣が小さいとか、そんなけちなことを云ふんぢやないんで、——さし當りここに仕事があるからやるだけの話ですよ。高等政治とやらは、あなた方にお任せしますよ。もともと、わしは勞働者なんだ！」

必要以上に昂奮してゐた林は、この時、すつかり態度を改めて、卓越しに手をさしのべた。ちよつと考へてから、田中はその手をがしつと握つた。

『よし、さつそく入黨の手續きをとつて上げる。——今夜は、ここで泊つて行きたまへ。』

『もう、わたしには宿はないんで、先刻街中に暴動の氣分が濃厚だつたもんだから、呼び出されたのも、てつきりそれだなと思つて駈けつけたわけですよ。……ともかく、わしはわしとして一働きやつて見ますから、安心してゐて下さい！』

それから上海總工會の第三次暴動まで、日本人間に屢々テロリズムが行はれた。怪しげな通信社を

經營してゐる松山覺次郎も、日本から政治犯を追ひ落しに來た某高官と、六三亭ガーデンからの歸りに狙撃された。路傍に棄てられ彼れの屍體の上には、日本語で、

『支那から手を引け！』

と書いた紙片が載つてゐた。

誰が誘拐したともなく居なくなつたユーカリのとみ子のオペラ・バッグだけが、どこからともしれず小包で届けられて、中を開いて見ると、一枚の紙片に、

『支那から手を引け！』

と書いてあつた。

電車のゼネ・ストで、大衆的デモンストレーションが上海中で行はれた時、その寫眞を撮影しようとして、支那人群集に殴ぐられた大友天來の人事不省になつたポケットにも、やはり同じ紙片が発見された。

最も日本陸戦隊にとつて困難な仕事は、支那人の便衣隊を発見することよりも、彼等の間に散布される日本語の簡単なスローガンの書き手を探索することであつた。それらには、一樣に、



『支那から手を引け！』

とだけ書いてあつたのである。

その文字は、上海にゐる日本人の間に、必ず何か悶着が起ると影のやうに現はれて、壁か、枠か、卓の上か、窓硝子か、或ひはポケットに、時には屍骸の上に貼りつけられてあつた。

三月二十一日、湖北會館が上海のプロレタリアによつて占領され、再び裏切者、蔣介石の手によつて掠奪された時、勇敢に敵の砲弾を浴びて闘つた闘士のうちに、その死に顔がどうしても支那人でないと思はれた一人の黨員がゐるた。

本部でよく調査すると、その男の名前が、『田功中』であつたことが判明した。介紹校友報告表にも、単に、

『中華民國人 田功中』

とだけしるしてあつた。

不思議とその男の戦死から、『支那から手を引け！』のビラは上海から消えたが、それが慥かに田中功であつたかどうかは、怒濤千來の革命のどさくさに紛れて、誰しも詮議する者はなかつた。

その後、林幸作が門司へ上陸した時に、それが本物の田中功であつたといふので、危く官憲の手を道れたことがある。——いづれにしても、ことの實否は崎山國松に糺せばわかるのであるが、その崎山は行方不明になつて杳としてわからない。

支那から手を引け 終



昭和五年十一月十日印刷

支那から手を引け

昭和五年十一月十五日發行

定價五十錢

著者

前田河廣一郎

發行者

鈴木貞

東京市麹町區九ノ内二ノ一八

印刷者

君島潔

東京市小石川區久堅町一〇八

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町一〇八

發行所

株式會社

日本評論社

東京・丸ノ内・昭和ビル

振替東京一六 電話九ノ内(25)

四一三一  
四一三二  
四一三三



新作家長編小説選集

支那から手を引け	武装せる市街	女工戦	異國の戦争	魚河岸	暴動	砂糖 <small>近刊</small>	陰謀	燃える森林 <small>近刊</small>	稚き闘士	或る時代の群像
前田河廣一郎	黒島傳治	今野賢三	小牧近江	金子洋文	伊藤永之助	細田民樹	細田源吉	平林たい子	葉山嘉樹	青野季吉

各冊十五錢・本日評論社版・三四六頁判



Handwritten text on a small label in the top left corner of the left page.

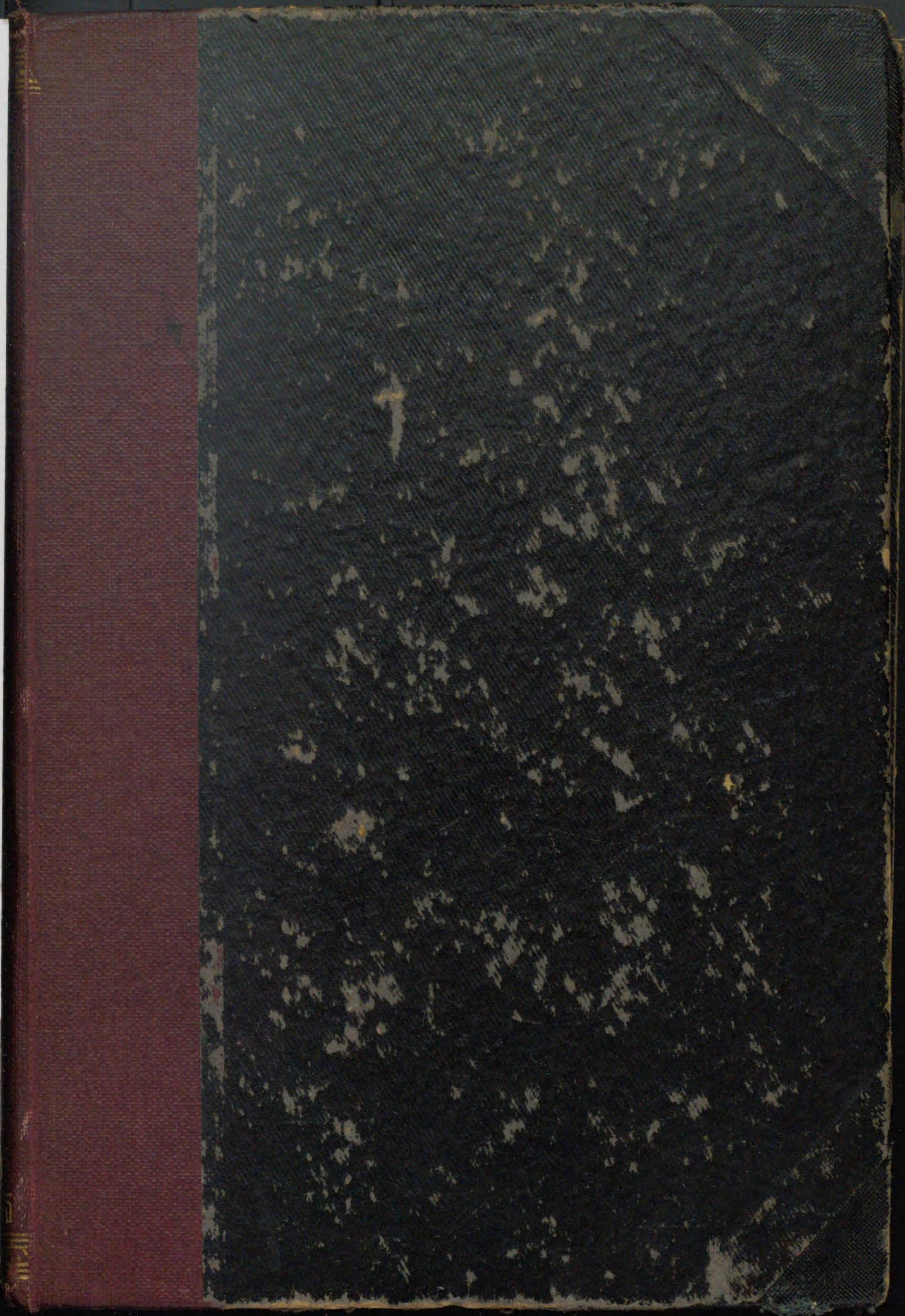
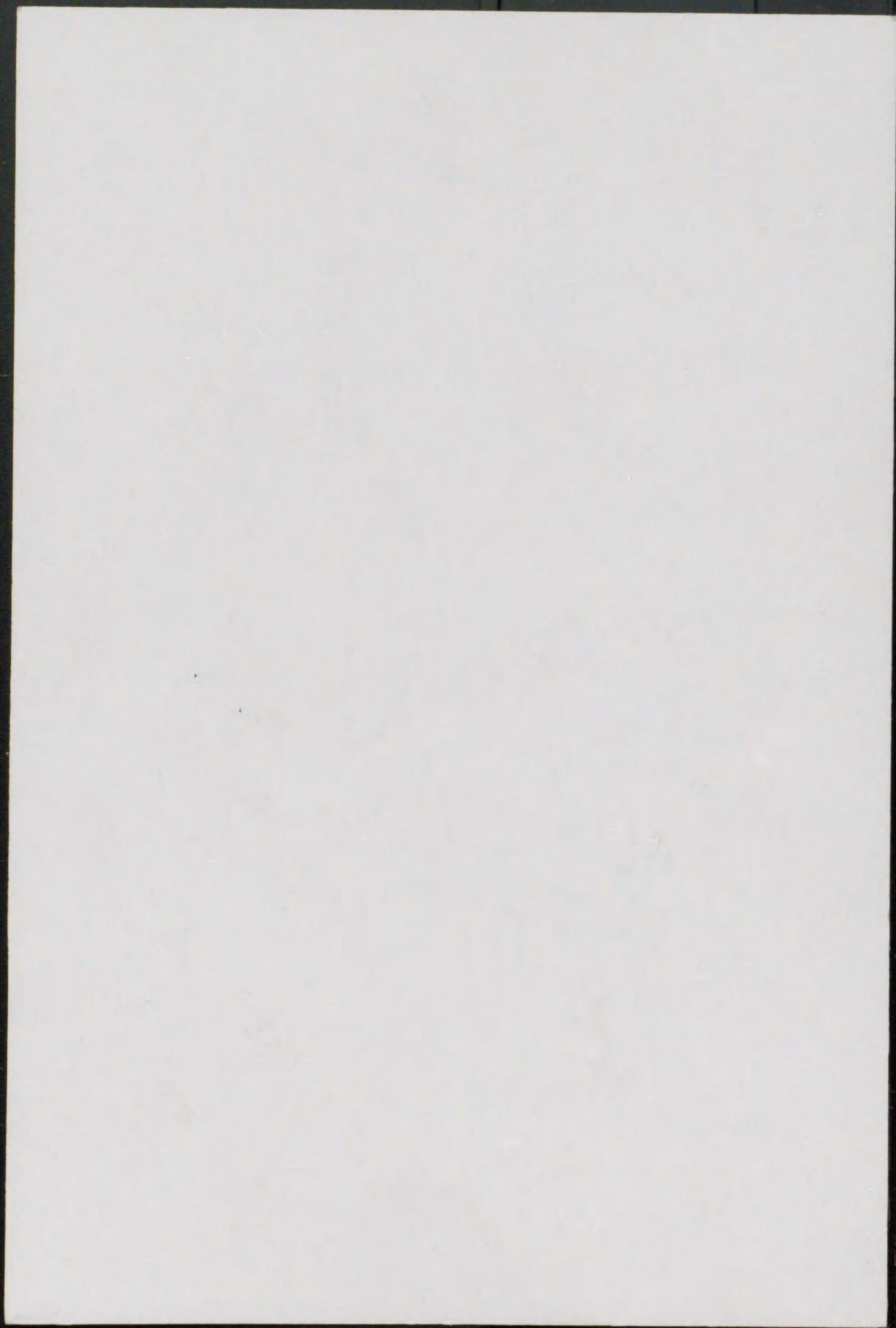


6  
1.



613  
13





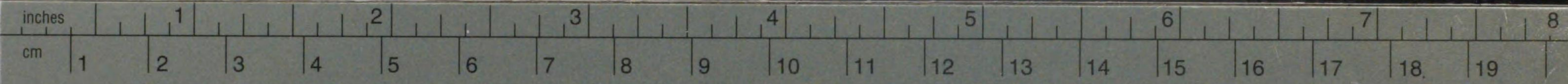


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

